

中野区教育委員会会議録 平成24年第14回定例会

○開会日 平成24年4月27日(金)

○場 所 鍋横区民活動センター

○開 会 午前 10時00分

○閉 会 午前 11時30分

○出席委員(5名)

中野区教育委員会委員長	高 木 明 郎
中野区教育委員会委員長職務代理	大 島 やよい
中野区教育委員会委員	飛鳥馬 健 次
中野区教育委員会委員	山 田 正 興
中野区教育委員会教育長	田 辺 裕 子

○出席した事務局職員(10名)

教育委員会事務局次長	高 橋 信 一
副参事(子ども教育経営担当)	白 土 純
副参事(学校再編担当)	石 濱 良 行
副参事(学校教育担当)	宇田川 直 子
指導室長	川 島 隆 宏
副参事(知的資産担当)・中央図書館長	天 野 秀 幸
副参事(学校・地域連携担当)	荒 井 弘 巳
副参事(特別支援教育等連携担当)	黒 田 玲 子
副参事(就学前教育連携担当)	海老沢 憲 一
副参事(子ども教育施設担当)	伊 藤 正 秀

○担当書記

子ども教育経営分野	片 岡 和 則
子ども教育経営分野	仲 谷 陽 兵

○会議録署名委員

委員長	高木明郎
委員	大島やよい

○傍聴者数 11人

○議事日程

[協議事項]

(1) 子どもの健康について ～子どもの体力と生活習慣～

[報告事項]

(1) 委員長、委員、教育長報告事項

・ 4 / 25 平成24年度中野区幼稚園教育研究会総会について

(2) 事務局報告事項

①中野区幼児研究センター「運動遊びプログラム」の取り組みについて（就学前教育
連携担当）

中野区 教育委員会
第 1 4 回定例会
(平成 2 4 年 4 月 2 7 日)

午前10時00分開会

高木委員長

おはようございます。

教育委員会第14回定例会を開会いたします。

本日の出席状況は、全員出席です。

本日の会議録署名委員は、大島委員にお願いいたします。

本日の議事日程は、お手元に配付の議事日程表のとおりです。

さて、本日の「地域での教育委員会」は、開かれた教育行政を一層進めるため、年2回程度、区民活動センターなどに会場を移して開催しているもので、本日で21回目の開催となります。

会議の進行は通常の教育委員会と同じように進めてまいります。本日の事務局報告事項「中野区幼児研究センター『運動遊びプログラム』の取り組みについて」は、協議事項「子どもの健康について ～子どもの体力と生活習慣～」と関連する内容となっておりますので、協議事項についての事務局説明後、引き続き事務局報告の順で議事を進行させていただきます。

また、本日は会議を一たん休憩し、協議事項「子どもの健康について ～子どもの体力と生活習慣～」及び事務局報告事項「中野区幼児研究センター『運動遊びプログラム』の取り組みについて」に関して、傍聴されている方々のご意見をいただく時間を設けたいと思います。その後、会議を再開し、いただいた意見を参考にしながら、引き続き協議を深めてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、日程に入ります。

まず、協議事項です。

<協議事項>

高木委員長

協議事項「子どもの健康について ～子どもの体力と生活習慣～」の協議を進めます。

川島指導室長、説明をお願いします。

指導室長

それでは、私のほうから「子どもの健康について ～子どもの体力と生活習慣～」について、資料に基づいてご説明を申し上げます。

まず初めに、児童・生徒の体力テストの結果からお話を申し上げます。まず、この体力

テストですが、ねらいが三つあります。1点目は、児童・生徒、子どもたちが自分自身の体力の現状や課題を知るということです。2点目が、学校としては子どもたちの実態に合った体力向上のプログラムをつくって、そして、それを実施していくということ。そして、教育委員会のほうとしては、体力向上について教育委員会の施策及び事業を実施していくという3点のねらいがございます。

それでは、お手元の表を見ていただきたいのですが、まず初めに、対象学年は小学校1年生から中学校3年生まで、すべての児童・生徒に対して実施をしているものです。種目ですが、小学校が8種目、中学校はそれに持久走が1種目加わった9種目で実施をしています。

そして、そこにある数値のところなのですが、「中野スタンダード通過率」と書いてあります。この「中野スタンダード通過率」について少し補足をいたします。

この「中野スタンダード」というものは、2007年に東京都が体力調査を実施して、その70%の児童・生徒が到達した数値を基準として、それをどれくらいの子どもの割合が超えているかというもので示しているものが通過率でございます。

この通過率を見ていただきますと、いい部分としては反復横跳び、50メートル走の通過率の割合が男女とも高いことがおわかりいただけるかと思います。また、課題となる部分ですが、握力、そしてボール投げですね。ボールのところの通過率が男女ともに70%に達している学年がないことがおわかりいただけるかと思います。

課題となる握力、ボールを投げるということについての分析なのですが、まず、握力については、日常生活、また遊びの中で重いものを持つとか、ぶら下がる。小学校で言えば、雲梯という遊具にぶら下がるような経験が十分でないことが考えられます。また、ボールを投げるということについては、単に筋力の問題だけでなく、体をひねるなどの経験があるお子さんとないお子さんの差が大きいということがここから読み取れるかと思います。

こういう調査結果を受けてどういう取り組みが必要かということなのですが、まず、学校としては、体力向上のための具体的な方策を講じる必要があるかと思います。子どもの体づくりですので、例えばランニングマシンで走るとか、ジムにあるようなトレーニング的なことをするのではなくて、子どもたちがやってみたいとか、やってみようと思うような工夫を学習の内容の中に入れていくことが必要かと思います。

具体的に言いますと、ゲーム性、例えばボールを投げるといったことなのですが、これは低学年の授業で私は見たことがあるのですが、箱を置いて、その箱に入るようにドッジボ

ールを投げる。そうすると、ふわっとしたボールではだめなのです。真っすぐ投げないとボールは入りませんので、そういうようなゲーム性を取り入れるですとか、またはそれを得点化していく。子どもは100点を目指すのですが、その先に150点を設定してあげると、それにまた向かっていくわけなんですね。そういうような子どもの発達段階などの工夫を勉強の中に取り入れていくことが必要かなと思います。

また、休み時間や放課後に遊ぶ機会をふやすということも学校は当然取り入れるのですが、学校だけで子どもは生活しているわけではないので、家庭に帰ってからそういう体を動かすことが必要であるということを保護者に対して啓発する。こういう調査のデータなどを示しながら啓発をすることもとても重要なことかなと考えます。

また、教育委員会としての取り組みなのですが、スポーツ推進校に対して専門的な指導員を派遣するですとか、教員に対して体力向上のための研修会を開くようなことに取り組んでいるところです。また、先ほど申し上げたように、保護者や地域にも啓発をする必要がありますので、昨年度で言えば、「おやこ元気アップ！事業」を10月に谷戸小学校で行っています。また、全区として取り組んでいるフラッグフットボール大会などを契機として、運動することの大切さを啓発していくことが必要であると考えています。

めくっていただきまして、体力調査のアンケート結果ということで、子どもたちがどのくらい運動しているかというものを示したものです。上の段は週に何日くらい運動をしているかということを調査した結果であります。

これを見ていただくと、週3日以上運動している児童・生徒の割合は、中学校は特に男子が高い数字が出ているかと思います。これは、部活などの運動をする機会があるからこういうような数値が出ているかと思います。また、小学校では、男女とも学年が上がるほど増加する傾向にあるかなと思います。ただ、1点気になるのが、ほとんど運動をしていないという数値が中学校の女子になると少し高い割合が示されております。これは男女の差もあるのですが、だんだん体重がふえてきて、運動をする機会が減っているお子さんが出てきていることが原因かなと思います。

下の段は、何時間くらい運動しているかというところです。小学校のところを見ていただきますと、男子は大体1時間から2時間を少し超える、高学年になると2時間を超える子どもが多いかなと思います。女子は時間としては少し減ってしまして、30分から2時間までというところが比較的多い数字です。中学校を見ますと、男子は2時間以上の数値が大変高いです。女子は先ほど申し上げたように、2時間以上のお子さんもいるのですが、

30分未満という運動を余りしていないお子さんの数も多いことがここから読み取れるかと思えます。

続いて、朝食をとっている状況です。中野区は朝食を毎日食べるお子さんの割合が比較的高いかなと思えます。これは、家庭が一生懸命努力をしてくれている成果が出ているかなと思えます。全く食べていないというお子さんは小学校で1%、中学校では2%から3%いるということです。

そして、生活の中で大切な睡眠時間を(3)で示しております。8時間という数値が一般的に言われる数値なのですが、この8時間というのを考えてみますと、例えば朝7時に起きるとすると、寝る時間が11時なんですね。ですから、小学生が夜11時に寝るというのは余り望ましくないかなと思えますので、小学生であれば8時間以上の確保が必要かなと思えます。見ていただきますと、学年が進行するにつれてだんだんと時間数が減ってくる傾向にありますし、また、中学校になりますと、特に中学校3年生は受験がありますので、8時間以上が大きく下がっていることは、年齢といえますか、その学年の特質としてしようがないかなとは思っているところであります。

最後に、テレビの視聴時間についての調査結果です。小学生では、一日に2時間以上テレビを見ている子どもが学年が上がるにつれて増加傾向にあります。ただ、今の子どもたち、特に中学生の生活を考えると、インターネットというものが——昔はこの調査はテレビの時間と考えていたのですが、インターネットを見る時間もありますので、一概には言えませんが、やはり2時間ぐらい子どもたちの生活の中でテレビの時間が占めていることがわかりいただけるかと思えます。

こういう調査結果を受けて、教育委員会としては、学校に対して生活リズムや生活習慣に対しての直接的な指導もそうなのですが、やはり家庭と協力して生活リズムを整えていく必要があるということについて投げかけていただきたいかなと思えますし、また、保護者会やPTAの集まりなどを通じて理解、啓発に努めていく必要があると考えております。以上でございます。

<事務局報告事項>

高木委員長

引き続きまして、事務局報告に移ります。

「中野区幼児研究センター『運動遊びプログラム』の取り組みについて」の報告を、就学前教育連携担当、海老沢副参事、お願いいたします。

副参事（就学前教育連携担当）

それでは、「中野区幼児研究センター『運動遊びプログラム』の取り組みについて」のご報告をさせていただきます。取り組みにつきましましては、幼稚園、保育園の運動能力向上の取り組みということになります。

幼児研究センターの内容について、最初に若干説明させていただきますと、幼児研究センターは、保育園、幼稚園、小学校が連携して幼児教育の向上を図るという基礎的な研究と啓発をやっていくために平成19年度に立ち上げてございます。当時の現場、保育園、幼稚園の調査から、転んだときに手が出なくて、顔のけがが多くなってきたということが多く聞かれまして、多様な体の運動を幼児期に経験することがやはり小学校へ向けての必要な事項であるということが提起されておりまして、中野区の幼稚園、保育園、子どもたちの身体能力についての実態調査をこれまで実施してきたところでございます。

資料に基づきまして説明させていただきたいと思いますが、1といたしまして、「幼児研究センターのこれまでの取り組み」というところをごらんいただきたいと思います。

これまでにわかってきた事柄といたしまして、①番、中野区の幼児の身体能力の平均は全国平均と大差はないのですが、個人差が大きいということがわかってまいりました。大差はないというところは図表の1をごらんいただきたいと思います。それぞれの体力測定の結果でございますけれども、中野区と全国平均との間で大きな差は見られていません。これは5歳児、幼稚園の年長の後半ぐらいの時期でございます。

一方で、個人差が大きいということでございますが、1枚めくっていただきまして、次のページの図表2のところをごらんいただきたいと思います。横の棒が年齢に基づいた平均の伸びでございます。年齢に応じて運動能力が向上していくところが見えていると思います。この中で特筆するのはボール投げと体支持持続時間——体支持持続時間というのは、両手をつきまして足を上げる運動でして、その時間をはかるというものでございますが、これを見ますと、縦棒のところ標準偏差をとっておりまして、縦棒が長いほどばらつきが多いということをお知らせいたします。

この図表の下の方に注釈が書いてありますが、体支持持続時間では男女各年齢ともばらつきが多く、特に年齢が上がるにつれてばらつきが大きくなっています。ボール投げにつきましても、女児に比べ男児のばらつきが多いということでございますが、平均値も高い。男のお子さんは、ボール遊びに積極的に取り組むお子さんとボール投げを余りやらないお子さんが非常にばらつきが大きいということございまして、女のお子さんは全体的

に余り積極的にボール投げに取り組まないということがわかっております。これを見ますと、やはり経験による伸びが非常に大きいものであるというようなことが期待できると考えております。

もとのページに戻っていただきまして、②番目といたしまして、歩数と活動量の調査を行いまして、中野区の子どもたちは全般的に活動量が少ないということが判明しております。これにつきましては次のページをまためくっていただきまして、図表の3をごらんいただきたいと思っております。

図表3に活動量調査の結果というのがございます。これの左側の表でございますが、万歩計をつけまして一日はかっていたのですが、平均の歩数を見ますと1万歩を下回るものが多いということで、幼児の平均は1万歩以上という結果が出ておりまして、歩く歩数も若干少ないのかなということでございます。

右側の表でございますが、中強度以上の活動時間でございます。中強度以上の活動というのは、普通歩行ではなく、早歩き以上の少し強目の運動ということになりますが、その時間をはかったものでございます。これにつきましては、全国的な調査によりますと、一日に80分から90分ぐらいでございますが、中野区の場合はそれを下回って、少ないという結果がございます。この結果の中でまた特に見ていただきたいのは、やはり平日と休日の運動量の差が大きいということで、ご家庭で運動する、体を動かすことが少ないのではないかとこのように調査結果としては出てございます。

また表のページに戻っていただきまして、最後の③番でございますが、投げる、逆さになる、腕で支えるなどの経験がやはり不足しているということでございます。下の※印のところ小さく書いてございますが、前転や鉄棒遊びの前提となる体を逆さまにした状態を経験したことがない幼児が多いですとか、あるいはマット運動等のときに手をつけて体を支えた経験がなく、手の平を広げて手をつくことができないお子さんが非常に多いという実態がわかりました。幼児の実態や不足する経験を、マット運動ですとか、運動器具を使ってということが必要なのですが、なかなかそういった器具も余り利用されていないという保育の実態が把握されたところでございます。このようなところは、幼児期の経験によって、小学校に向けての伸びが非常に大きい事例だと考えております。

1枚めくっていただきまして、右側のページでございます。こういった事例を踏まえまして、幼児研究センターでは平成22年度から、活発に体を動かしているいろんな遊びに取り組んで、体を動かすことが好きな子どもを育てる、意図的にこういったことを好きになる子

どもを育てていかなければいけないということで、今課題となっている事項を組み込んだ運動遊びプログラムをつくりまして、区内の保育園、幼稚園での実践を進めているところでございます。

運動遊びプログラムの中身といたしまして、一つ目はボール遊び、これは投げる力をはぐくむということでございます。二つ目がマット遊びで、これは体支持力とか腕の力を経験させるということでございます。三つ目が多様な動きを経験する遊びということで、集団で鬼ごっこに取り組む。これは活動量の確保ですとか、子どもたちにいろんな体の動きを経験させるということで、こういったプログラムを組んで、保育園、幼稚園で活動時間を設けて集団で行うことで効果があるのではないかとということで実践しているところでございます。

今年度、本格的にそれを取り組みまして、実際、プログラムを取り組んでいる園とその他の園で効果の伸びを見たものが23年度の取り組みとして2番以降に書かれてございます。

(1) 番ですが、その伸びについて検証を6月から11月までしたのですが、大きな伸びの差は今回の測定では計測できなかったところがございますけれども、実践した中では子どもたちが運動遊びに積極的になったというような声が寄せられてきたところでございます。

(2) 番といたしまして、活動量の調査を行いました。これは、活動量計という運動のカロリーをはかれるものでございますが、活動量をはかれる活動量計をつけていただきまして調査をいたしました。

この中で一番問題になっているのが、活動しない子と活動する子の差が非常に大きいということございまして、活動を余りしない子どもをいかに体を動かすほうに持っていかということをやっていく上で、一般の保育園、幼稚園では自由遊び、自由に遊ばせる、自主的に遊ばせることが一般的には推奨されているところですが、特に中野区のような環境的に言って園庭が余り広くない、あるいは利便性が高く余り活動量が見込めないといった状況を踏まえると、図表5の戸外一斉活動のグラフと自由遊びのところを見ていただきますと、運動の量をすべての子どもたちに確保していくためには一斉活動がやはり必要だということでございます。一斉活動については、活動をしない子と活動をよくする子の差が非常に少ないということがございますので、戸外一斉活動をしっかり保育のカリキュラムの中に取り込んだ形で、やはり活動量をふやしていく必要が中野区の場合にはあるのではないかとということがわかってございます。

一番最後のページの(3) 番でございますが、この取り組みによりまして、子どもたちの意

欲にどのくらいの影響があったかをはかってございます。表のグラフをごらんいただきますように、この運動遊びプログラムに取り組んだことで、遊び全体に積極的になっていく子どもがふえたという結果が出てございます。ですから、そういった活動に取り組むことによって、体を動かしたり、いろんな遊びをすることに対する意欲が増してきたのではないかとこのことで確認がされてございます。

幼児期の取り組みといたしましては、小学校につながる部分で、やはり自分で意欲的に運動に取り組む子どもをはぐくんでいくことが一番大切だと考えてございまして、3番の「平成24年度の取り組み」といたしましては、この運動遊びプログラムを各保育園、幼稚園でしっかり実施していくということでございます。すべての子どもたちに一定の運動の機会が与えられて、体を動かす楽しさから子どもたちの意欲を高めていくということを幼稚園、保育園の中でやっていきたいと考えてございます。

運動遊びプログラムを実施することによりまして、体をバランスよく動かすことと活動量をふやすことに取り組み、小学校の体力向上プログラムガイドラインの取り組みと連携する、つながりを持った取り組みとして、小学校において先ほども報告されたような課題に十分つなげていくための改善を図っていきたいと考えてございます。以上で報告を終わらせていただきます。

概要版をお配りさせていただきましたので、後ほど詳しくはそちらを見ていただきたいと思います。以上でございます。

高木委員長

それでは、協議事項「子どもの健康について ～子どもの体力と生活習慣～」及び事務局報告事項「中野区幼児研究センター『運動遊びプログラム』の取り組みについて」について、各委員からご質問、ご発言がありましたらお願いいたします。

大島委員

今の運動遊びプログラムの報告に関して、三つのプログラムを用意して、マット遊び、ボール遊び、多様な動きを経験する遊びということなのですが、具体的には例えばどんなようなことをやっていたのかということをお教えいただきたいのと、これは幼稚園の普通の担任の先生と幼稚園にふだんいらっしゃる方だけで実施したのか、あるいは昨年度やよいこども園に行ったときに、外部の運動指導員の方に来ていただいて、大きいところでマットを敷いたりして特別な指導員の方が教えているのを拝見したことがあるのですけれども、そういう外部の方をお招きしてやるのか、どんな形態でやっていたのかということな

のですけれども。

副参事（就学前教育連携担当）

プログラムにつきましては、やはり幼児期から徐々にルールを理解していく形で進めていくことが必要だと思っております、例えばボール投げであれば簡単な当てから始まって、初めの段階ではなかなか真っすぐ投げられない、弧を描いて上のほうに投げてしまうことがあるので、例えば的を低くしてみたりという工夫によりまして、だんだん体を使って投げられるような動きにしていくということから、最終的にはゲーム性がある動きに持っていくような、段階、ステップを踏んだプログラムをつくっているわけでございます。

マット遊びにつきましても、4歳児から始める中で複雑なルールがあるものはなかなか難しいわけですから、本当に単純な体の動きからだんだん複雑な動きになっていくような一定の流れのプログラムをつくっております、それを段階的にやっていくことによりまして様々な力がつくであろうということで、プログラムをつくらせていただいております。

もう1点でございますが、私立幼稚園、私立保育園も多いのでございますけれども、特別な講師を呼んで、時間をつくって運動をやっているというカリキュラムが含まれているところも実際にはございますけれども、このプログラムは保育士だったり幼稚園教諭が実際理解をして、それを保育の中で取り組んでいくことが大切だと思っております、その専門家に任せてしまうということではなくて、すべての日常的な保育の中でこういったことが行われていくことが大切でございます。特別にやると、例えば1週間に1回とかいうことになってしまいますので、やはり日常的な中でこういうことがやられることで活動量が確保できると思えますし、順々に子どもたちも理解してついていくということでございますので、やはり保育士がしっかり理解して進めていくことが大切だと考えています。

高木委員長

それでは私から。まず、運動遊びプログラムについてですが、最初のところで「中野区の幼児の身体能力の平均は全国調査と大差ないが、個人差が大きい」というご説明でしたが、これは全国平均の調査のばらつき、標準偏差と比較して中野区のばらつきが大きいということなのでしょうか。それとも中野区だけの状況を見て、ばらつきが大きいというご説明なのでしょうかということが1点。

あと、幼児については全国平均と大差ない、ボール投げも大差ないということなのですが、中野スタンダードのほうになると、いきなり小学校1年生からボール投げが低いのは、同じ中野の子どもが幼稚園までは平均だけれども、小学校に入ったら急に下がるというの

はちょっとよくわからないのですが、もしそれが指導室長のほうでわかればご回答いただきたいのですが。

副参事（就学前教育連携担当）

このばらつきが大きいというのは、全国的な中での調査結果が出ておりませんので、これは中野区の中でデータを見まして、やはりばらつきが非常に大きいということがわかってまいりましたので、そういう記載をさせていただいております。

高木委員長

そのばらつきが大きいというのは、例えばこれぐらいの母集団の場合はこういうふうに標準分布すると予測されるけれども、それと比較してばらつきが大きいという統計的なものなのでしょうか。それとも、ちょっと言い方は悪いのだけれども、何となくばらつきが大きいということなのでしょうか。

副参事（就学前教育連携担当）

なかなか統計的なものは現段階ではたくさん入手ということにはなっておりませんので、全国平均と比べるということでお示しできないのですが、保育園、幼稚園の中で、保育士あるいは幼稚園教員の実際の調査といったところも踏まえますと、やはりそういった経験があるお子さんと全く経験がないお子さんの間で、投げ方一つとっても、経験がある、ないで非常に大きい差が出ているというのは、実際の現場を見た中でも非常によく把握できているところとなっております。

高木委員長

余りこだわるつもりはないのですが、一般論として子どもの体力にばらつきがあるとか、あるいは年齢が上がるにつれて個人差が開いてくるというのは私の感覚だと当たり前なので、特に中野区としてそこが顕著だということであればそれに対応する。中野スタンダードのほうですと、やはり中学生になると、運動部をやっている子とそうじゃない子と大きくて、特に女子の場合は運動をやっていない子が多いのでこういうことをしようかという、その問題、課題に対してこうやっていこうというのが見えるのですが、幼児の場合はなかなか測定方法が難しいのですけれども、何か中野区にそういう特色的なものがあるのかなとちょっと疑問を持ったのでお聞きしました。

指導室長

幼児のこの結果と小学校の体力テストの結果の因果関係は正直言ってわからないというお答えで、では、小学校の1年生がどのくらいソフトボールを投げることができればいい

かというスタンダードの数値なのですが、目標値が7メートルになります。これが学年が2年生になると10メートルという形で上がって行って、6年生ではスタンダードとしては23メートルくらいは投げてほしいということを示しているもので、その通過率が今そこにお示しをしているような形になります。ちょっと済みません。就学前との関係についてはもうちょっと調べてみたいと思います。

高木委員長

運動遊びプログラムのほうですと、中野区のボール投げの平均が、ちょっとボールの大きさも違うかもしれませんが、7.18ですね。その平均というと、半分ぐらいが標準分布していればクリアしているので、中野スタンダードは7割通過ということで、そこで1歳ぐらいまで違うのかなと。ただ、運動遊びプログラムは、私学の幼稚園さんもありますし、公立、区立の幼稚園さんは2園だけですから、そこに関係なく、全体に向けて小・中学校につながるような研究だと思しますので、ぜひ情報交換をしていただいて、入学、就学後に生きるような形にさせていただけるといいかなと思います。

山田委員

幼稚園、保育園、そして小学校で、学校の中で取り組んでいることは一つの結果かなと思うのですが、やはりこれが家庭、地域とどのように結びついていくかというのは、家庭の中で今運動できる環境があるかということ、なかなか難しいのかなと思うのです。一つには、就学前のお子さんたちを育てている保護者の皆さん方が忙しすぎて、子どもと接する時間がなくて、運動を一緒にできる時間がないのが現状じゃないかなと思うんですね。

そこにもってきて、ご家庭の中で例えば畳がなくなった時代ですから、私の近くにスポーツクラブがありますけれども、今一番人気があるのはマット運動をやっている体操教室ですね。そういったことも家庭の中ではできない、やっていない状況の中で、ですから、でんぐり返しとかが不得手になってしまうことは予想できるので、先ほどちょっとお話がありましたけれども、こういった取り組みをいかに保護者の方に理解していただいて、ご家庭の中で取り組んでもらえるかということを実際日常的にやっていかなければいけないのかなと思います。

それから、今、小学校で、幼稚園、保育園で鉄棒がどのくらいの頻度であるのか。あるいは昔ながらの遊具が、例えば地域の公園で鉄棒があるところはだんだん少なくなっていますね。危険だということで。そうすると、ぶら下がりということはほとんど経験しないですよ。小学校に入って初めて鉄棒に出会うから、落下してしまうことがあるんじゃない

いか。それはなぜかという、握力がない。握力をつけることに対して今のところ何もはっきりした指導をしていないという実態があります。手に持つよりランドセルとか、肩に背負うということが一つあるのかなと。そういう生活習慣の問題もあるんじゃないかなと思いますね。

あとは時間の問題で、お父さん、お母さんが非常に忙しいということと、忙しいからゆえに、ビデオ、テレビの視聴の時間が長くなる。テレビやビデオがすべて悪いというわけではないですけども、日本ぐらいなのです。こんなにテレビの視聴が長くて、子どもの睡眠時間が短い国は世界でも余り類を見ないと言われているので。

もともと人間は昼間働く動物ですから、朝の光を浴びて生体時計をリセットするのですが、夜遅くなってしまうので、そのリセットがうまくいかない。だから、朝の運動が非常に苦手になってくる。こういういろんな問題が絡んでくるのかなと思うのですが、こういった取り組みを各施設でやっていただいて、これを何とか地域や家庭に広めていくということをこれから一生懸命やっていかなければいけない。その辺は、今の取り組みの現状はどうでしょうか。

副参事（就学前教育連携担当）

一つその前に、園庭面積を広くとりたいということがあって、遊具が撤去されているような状況もございまして、特にブランコとかは危険性があるということで、開設当時はブランコ等があったのですが、長年の経過の中で使われなくなって撤去されているという状況にあります。公園についても同じような状況があると聞いてございます。

やはり保護者の理解が大切だと考えておりまして、こういった研究の成果というものは、特に保育園等では保護者会の中で説明しながら大切さについて話をしているところでございまして、また、体力測定の結果について、保護者に協力していただいて活動量計をつけてもらって、どのくらい活動するのかわかってございますけれども、保護者の方で割とうちの子は活発なんだよと感じていらっしゃる方でも余り活動していないという実態があります。要するに、意識と実際の活動量とのギャップが結構あるということで、それについては個別の面談等でお話をして気づいていただくということも進めているところでございます。

指導室長

この体力のことなのですが、結局、健康を維持するためには体を動かすことが必要だということになるべく小さい子どものときからわからせていくことが必要だと思っています。

ですので、こうやって単に選手を育成する上でのデータではないということで、それを保護者に伝えていく必要があるかと思います。小・中学校で学校保健委員会というのがありますので、学校保健委員会などでこういうデータをもとに、こういう傾向があつて、これがずっと進んでいくと健康を維持するためによくないということを具体的にお伝えすることが大切だと思っています。

また、学校から帰った後、地域での受け皿というところなのですが、中野区の場合はキッズ・プラザとかの整備も進んでいるかと思いますが、それから児童館とか、そのようなところで体を動かせるような場所を確保していくというのも大きなことかなと思っています。

山田委員

ありがとうございました。あともう一つは、先ほど中学2年生での運動に対する時間が少なくなっている、特に女子において顕著であるということですが、小学校の中では結構体を動かすことをやっていたお子さんがいらっしゃると思うのですが、中学ぐらいになると二極化がありまして、一方ではスポーツクラブに入っているし、学校のクラブにも入っている、一方では帰宅部と称する方たちがふえている。両極端で、女子が特に帰宅部とは言いませんけれども、そういったことで体を動かさない。

医師会が受託しています中学校1年生の生活習慣予防健診の問診の中でも、中学校1年生の女の子ですら運動する機会は学校の体育以外ないと答えている方が20%ぐらいに上っているんですね。ということは、一番成長期のお子さんたちが体を動かすことに対する楽しみ、意欲がそこで少し薄らいでいるのですが、その辺は指導室としてどのような指導があればというふうにお考えでしょうか。

指導室長

先ほどご説明の中で運動の日常化とか、子どもがやってみたいというような工夫が必要だということを少しお話ししたのですが、例えば小学校で言えば先ほど申し上げたゲーム性ですとか、あと得点をしていくというもの。もう少し上がってくると、総合評価とか、自分のどこがよかったかというのを学習カードという形で子どもたちに視点を与えて、ここはよかったよとか、ここはもう少しだよという総合評価をすると、結構子どもは大人から言われるより友達から言われたほうが「ああ、そうか」と思って気がついて直す。

もう少し学年が進んでいくと、例えばデジタルカメラなどを使って実際にその場면을写して、それを手軽に見られるような時代になっていますので、そういうことを繰り返さな

がら、ここをこうやって頑張ってみようという、要するにスモールステップ的な、自分が何を直せばよくなるのかというところを意識させるような工夫だとか、幾つかそういうものを通して意欲を培っていく必要があるのかなと考えます。

山田委員

あともう一つは、そういった中で文部科学省が考えたのは、まさしく4月から始まっている学習指導要領の体育の中でのダンスですね。ヒップホップとか、そういった若者に受けているダンスに取り組んでいく、それは一つの施策と考えていいのでしょうか。

指導室長

そうですね。ダンスは中学校の1年生、2年生の必修になっていますので、子どもたちが体を動かす――競技をするだけが運動ではないので、そういったところも子どもたちにインパクトのある投げかけになると考えます。

高木委員長

会議の途中ですが、ただいまの協議事項及び事務局報告事項に関しまして、傍聴者の方のご意見をお伺いするため、ここで一たん休憩し、傍聴者発言の時間をとりたいと思います。

それでは、定例会を休憩いたします。

(休憩)

<定例会再開>

高木委員長

それでは、定例会を再開いたします。

<協議事項・事務局報告事項 再開>

高木委員長

引き続き、協議事項及び事務局報告事項について各委員からご質問、ご発言がありましたらお願いいたします。

飛鳥馬委員

子どもたちの体力のことはなかなか課題が多くて、難しいこともたくさんあるかと思っています。1点は、先ほど指導室長から体力テストの報告がありましたが、多分体力テストの結果は体力テストカードか何かで子どもたちに知らせて、保護者にも届いているのだらうと思うのですが、その反応が何かあれば、わかったらうれしいなと思っております。

つまり、なぜかという、私の感覚だと、「うちの子は体力ないね」と、走るのが速いとか遅いとかぐらいは簡単に「ああ、そんなものだ」と思って判断していると思うのですが、ボール投げや、シャトルランの結果がどのくらいかとか、そういうことまでよくわかっていないのだろうと思うんですよ。それで体力がある、ないと判断しているかもしれないので。だから、もっと体力というのは大事なんだよということを知らせるためにも、もうちょっと何か普通の教科学習、成績と同じように、体力のことも気にしてくれるかどうかということがあるわけで、そのことがちょっと気になっています。この体力テストのねらいは子どもの体力を知らせることと、先ほど最初におっしゃってくれましたけれども、そういうこともありますので。

あと、先ほどの傍聴者の方のお話にもありましたけれども、運動というのは、できる、できないというのがすぐわかってしまうのだろうと思うのです。どのくらい飛べたとか、飛べないとかね。それは余りにしなくてよろしいのかどうか。保護者が何か気にされていることがあるのかどうか。「そんなことまでわかってしまうの」みたいな意識が、ちょっと取り越し苦労かもしれないですけども、そんな反応があるかないかということも知ってみたいということがあります。だから、なるべく遊びの中でとかいろいろ言ってくさっているのは、そういう意味でわかるのですけれども。

それからもう1点は、保護者がどのくらい認識しているか。つまり、朝礼のときに倒れて頭を打ってしまう、顔を打ってしまう、手が出ないというのも随分言われているわけですね。あと、これは去年、高木委員長から聞いた話なのですが、後で詳しく説明してもらえばいいと思うのですけれども、大学生がインターンシップで職場実習に行った。お皿を洗う仕事をしたのだけれども、力がないために皿が持てないのでやめたい。そういう子もいるという、これは切実なことですよ。そういう子は本当に例外なのか、それに似たような子がいるのかどうかですね。そこまで言っていないと、やっぱり体力や握力がないとだめなんだよということまでなかなか伝わらないのかなと思うんですよ。そういう現状があるということ、ちょっと取り越し苦労みたいなこともありましたけれども、わかる範囲でお答えください。

指導室長

まず、保護者にどういう形で伝えているかということと、その声がどうかということなのですけれども、直接的な声は私はまだ把握をしていませんが、きょうお配りした資料の中で、一番最後のほうに個人に返すカードの様式をおつけしているかと思えます。

これは、一つのフォーマットに従って数値が書いてあったり、下のほうには総合評価という欄があるかと思うんですけども、そこに「おうちのひとによんでもらってください」ということで、その結果を踏まえてこういうところがすぐれているよとか、こういうところが課題だよというようなところを示しています。

その裏面に、どういうことをするといいかということで、筋力、持久力をアップさせるためにはこういうことをやってみるといいよという例などを示す中で、右側に「自己トレーニングメニューを作成してみよう」ということで、自分だったらどんなことをどの程度やればいいのか、この体力調査の結果を踏まえてもう一回見直すといえますか、自分自身の数値を知ることで見直す。

これを1枚1枚お返しするというのは、ぜひ家庭で一緒にそれについて考えてほしいという願いもこもっておりますので、そのあたりできちんと実態を知らせるということと、保護者にもそれを理解していただいて、家庭でうちの子はこの辺が弱いからこういうことをやってみようかという投げかけをしてもらえるようなことを願って、こういうものをお配りしているところであります。

大切なのは、やはり冒頭のねらいのところでも申し上げたように、自分がどのくらいのものなのか、どういうところに課題があるのか、どういうところがすぐれているのかということをもっと知るのが第一歩かなと考えているところでございます。以上です。

高木委員長

私は今、小学校3年生と中学校2年生の息子がおりまして、実際、去年、これを家に持ってきました。下の子どもはサッカーをやっておりますので、週2回、2時間以上の運動をやっております。上の子どもは特別支援学級に通っております、ほとんど運動しなくて、結果を見たら、これはいかんということで、昨年の秋から毎朝私と一緒に縄跳びを50セット掛ける5回と腹筋とラジオ体操を、この「体力要素とトレーニング例」にジョギングがいいよとか、ストレッチとか書いてあったので、一応これを参考にしました。ただ、最初は腹筋が1回もできなかったのも、手を持って引っ張ってリハビリのようにやりまして、半年ぐらいしたら、足を持ってやると50回腹筋ができるようになったんですね。

あと、握力が中2なのに15ぐらいしかなかったのも、ハンドグリップを買ってきましてやらせて、この4月に体力テストをやったら25ぐらいにはなったようなのです。ただ、下の子どもはちょっと微妙な年齢で言うことを聞かないのと、「僕はサッカーをやっているから大丈夫」と言ってやらないのですが、結構これは細かいデータがあって、多分ご家庭

では参考にしているのかなど。

ただ、偏差値とか、いろんな数字があり過ぎて、それを見て各ご家庭で、よほどひどくない限りは対応するのが難しいと思うのですけれども、私が最初、今中2の子どもが小学校に入ってこれを見たときには、なかなかこういうふうにシステムティックに来るのだなと。そのときはまだ教育委員会にいなかったもので、ちょっとびっくりした思いがあります。

あと、飛鳥馬委員からちょっとお話があったのは、私はふだん江古田にあります国際短期大学で学長をしていて、担当科目でインターンシップがありまして、昨年の夏に女子学生が2名、ホテルのレストランのバックヤードでインターンシップをやったのですが、お皿を重ねて持つのが重くて持ち切れない。あと、一流ホテルなのでちゃんとした靴を履いてやるということもあるのですが、腕が痛くて耐えられないので、5日間でギブアップした学生がいたということで、「いや、あなたはホテル志望と入学のときに書いたけれども、大丈夫なの」と。

学生はやっぱり夢を持って、キャビンアテンダントになりたいとか、ホテルで働きたいとか、そこは華やかなイメージを持っているのですが、実際は地味な作業もあるので、入ってから持てないことに気がつくよりはよかったかなと思うのですが、確かにこの調査であるように、よく聞くと、やっぱり中学生ぐらいから運動をやっていないというのはありますので、それを大学、短大に入ってから直すのはなかなか難しいなどは思っております。

山田委員

この体力測定の評価のペーパーは非常によくできているなと思いますね。これが学校の成績表と同じぐらいに家庭でご活用いただければありがたいかなと思うんですね。

一つ、例えばトレーニングプログラムの強度のところでは、自分の心拍数のマキシмумは220マイナス年齢であらわしましょうというのは、ボルグが提唱したボルグ・スケールと言いまして、一番簡単にできる強度のあらわし方です。どの年齢でもこのスケールを持っていれば、自分が今やっている運動がどのぐらいの強度なのかということがわかるぐらいの指標もつくられたので、非常に参考になるものなので、ぜひご家庭の中でこれが活用できればありがたいなと思っています。それが高木先生のように真摯に受けとめる保護者が多ければ、一緒になって子どもと運動の習慣をつけるというふうにつながっていけば、一番いいんじゃないかなと思います。

あと、先ほどご意見があったように、今の中野区の中での空間の問題ですね。私の近くにも公園がありますけれども、ボールはやってはいけない、バットを持って行ってはいけない

ないということになると、私も子どもを育てていましたから、親ですから息子とキャッチボールをするのが往年の夢でしたからやったのですけれども、それをやる場所がだんだんなくなってきた。ある公園でやっていたら、怒られたんですね。「ここはボール投げ禁止ですと書いてあるでしょう」って。それはそうだけれどもと。結局、やれなくなりました。サッカーもだめなのです。サッカーをやったら、それも怒られました。「ここはボール投げはだめなんですよ。ボールを使ってはいけません」と。そうすると、子どもたちはどこでやったらいいんですかということになって、先ほどの校庭の話が出てくる。

もう一つは、今度、中野区の中にスポーツクラブをつくっていきますよね。その中ですらスケートボードはだめだと言われてしまうと、いろんな意欲を持った子どもたちができなくなってくるので、ぜひ子どもたちが体を動かせる場、子どもたちにとって楽しい遊具、それは安全でなければいけないですけれども、安全性を担保するための物品だったり人であったり、そういうことを担保しながらそういう空間を多くつくっていかないと、学校だけでやっても定着しないんじゃないかなと。

あともう一つは、防災公園もできてきますから、防災公園はふだん公園ですよ。それできればスポーツができるような公園で区民に開放するという形で、中野区にはこういったいろんな施設があるのだということで、地域を挙げて体力を上げていく施策を教育委員会発でやっていかないと定着してこないんじゃないかなと思うのです。そういった取り組みが進んでいただければと思います。

高木委員長

今の山田委員の発言ですが、先ほどの傍聴者のお話にもありましたけれども、私どもの短大でもスケートボードを持ってくる学生がいるのです。でも、基本的にあれは公道ではやってはいけないものなんですね。キャンパスの片隅でやっていて、ほかの学生が危ないから注意すると、「じゃあ、学長、どこでやればいいんですか」と言われると、確かに言葉に詰まるんですよ。

例えばダンスが今度必修になります。ヒップホップとかをやります。この間、これもインターンシップの関係で、中野区の国際交流協会を先々週に訪問して、以前はあそこのところで鏡を見てダンスを練習していた子がいたのですが、いないんですね。よく見たら、「ダンス禁止」と張り紙がしてあって、人によっては迷惑だったり、夜間やったりするのかなと思うのですが、一方で体力向上、運動しましょうと言っている。私が子どものころはまだ中野にも空き地があって、ラケットベースとか、手打ち野球とかができた。でも、

もう宅地化がどんどん進んで空き地もないし、運動するところもないというと、なかなか厳しいですね。そういうことも、教育委員会だけではなかなかできませんけれども、区のほかの部局とも相談してそういうことを進めていかないと、一方で頑張れと言っておいで、場所がないというのはなかなか厳しいかなと思います。

ほかに委員の方。

大島委員

私も自分の子どものことでも困っておりました。娘は体を動かすのが嫌いで、スポーツとか体を動かすことを全然何もやっていなくて、私自身は正反対で体を動かすのが大好きですし、家でもいろいろビデオを買ってきて運動などをしているのですが、勧めても1回ぐらいやるだけでした。一方で背が伸びたいとか言って牛乳は飲むのですけれども、牛乳を飲んでも、運動をして体に刺激を与えないと骨もできないという、理屈で言うとなのですけれども、その運動をしないのでやっぱり背も伸びないまま、もうすぐ二十歳になります。今ごろになって「やっぱり運動をしないとだめかな」とか言っているのです。

小学校1～2年のときは一輪車を学校でやっけていまして、初めは結構おもしろがってやったりしていたのですけれども、やっぱりやめてしまいました。ですから、親がやってほしいと思っても、本人の性格とか、そういう限界もあるかなど。でも、そんなことを言っているのは教育委員会の立場としてはいけないので、やっぱり何か興味を持つきっかけとか、そういう場を提供するようにしなければいけないと思うのです。でも、今話が出ていように都会ということもあって、なかなかその場所がつかれない。学校の校庭を使うということはもちろんいいのでしょうけれども、それ以外にもっとまちの中で何かやれるような場所を提供することが我々行政側といいますか、できる立場としては考えなければいけないと思うのです。

今、中野区はいろいろ再開発をやっていますし、何とかの跡地の利用をどうしようとやっていますけれども、そういう中で何とか子どもが自由に動けるような場もあつたらいいのになど個人的には思っています。

高木委員長

では、教育長。

教育長

先ほどから運動できる公共施設が少ないというお話がありまして、今、教育委員会でこの議論をされている意見については公園担当のほうにも伝えていきたいと思っています。

中野区で最近、ここの近くにも大規模な公園をつくろうということで土地を購入したりしていますけれども、その公園の設計に当たってはある程度スポーツができるということも意図的に考え、政策的に考えて、例えば少年野球ですとか、少年サッカーの場所ができるような公園ということは配慮しているのですけれども、今議論している中では、集団スポーツということだけではなくて、運動の日常化、親子でちょっと行ってボール投げを楽しむとか、スポーツを楽しくというような、そういう設計にはなかなか公園としてはなっていない現状があるなど話を伺ったんですね。

それはいろいろ理由はあると思うのですけれども、限られた面積の中で効率的にやるのは集団スポーツであつたりもするのでしょうかけれども、一つにはそういう親子とか家庭で楽しむような場所が欲しいという意見がなかなか出てくる場がないということもあるのかと思うんですね。というのは、今の子育ての状況を考えると、スポーツをすることも大事だというふうに保護者の方が認識しておられるのであれば、小さいときから、もう赤ちゃんのときからスイミングスクールに入れるとか、子育ての外部化というのが大分あって、フィットネスクラブでサッカー教室をやったりとか、今ですと、女の子などはダンスに通っているお子さんもすごく多くて、そこにお預けしているからいいというような認識の保護者の方も非常に多いのかなとも思っています、なかなか親子で楽しむ、あるいはスポーツの大切さ、日常的にスポーツをやっていく大切さが伝え切れていないのかなというのが一つあります。

先ほど傍聴者の方がおっしゃっていたように、親子で楽しむ仕方がわからなかったり、どうやって遊びを子どもに伝えていったらいいかわからないというようなこともあるのかなと思うと、先ほどの運動遊びプログラムの内容をもっと保護者に伝えていくとか、そういう機会を意図的に保育園、幼稚園の側から保護者に発信していく、あるいは学校の側から発信していくということもこれからはしなければいけないなと感じました。以上です。

高木委員長

あと、私の次男の通っている小学校は今年の秋にキッズ・プラザができたんですね。正直申し上げて、公園というのは冬になると暗いですし、なかなか小学校2～3年ですと、子どもたちだけで遊びに行くのは私も妻も抵抗があつたのですが、小学校を一たん帰ってから行かせると時間が遅い。確かに冬場になると、帰ってから行くと暗くなってできないということがあつたのですが、キッズ・プラザですとそのままいられますし、雨の場合は雨の中でまた職員の方がいろんなプログラムをやってくれるので非常に喜んで、土曜日も

やっていますので、妻は毎日行きなさいみたいなことを言っていました。私のおいっことも別の区立の小学校に行っているのですが、そこはもう入学したときからキッズ・プラザがあって、本当にうらやましいねと言っていたんですね。

区としては順次キッズ・プラザを開設していく予定なのですが、なかなかすぐ来年度、再来年度と全部できるわけではないので、学校ごと、あるいはPTAの方とご相談して、あとのところは傍聴者の方のご意見もありましたが、柔軟にPTAとか、おやじの会でやっていただくのは非常にいいことかなと思っております。

大島委員

中野スタンダードということについてももう一回伺います。通過率という表があるのですが、先ほどのご説明では、東京都の70%の子どもたちができたという数字を中野スタンダードにしていると聞いたと思うのですが、それが違っているかどうかわからないのですが、そういうふうに理解したとしますと、この表で100%となっていたとしても、それは東京都の中の70%の子ができたことを中野区の全員ができるという意味とすると、それも例えば80%とか70%しかできないという、かなり東京都の子どもたちの中で低いほうになるのかどうか、それを伺いたいです。

指導室長

大島委員がおっしゃったように、このスタンダードは東京都の体力テストの結果で70%の子どもたちが到達した数値をスタンダードとしていますので、それを超えた子どもたちが何割いるかということがこの表であります。

その7割という数字の根拠になっているのは、学習指導要領が大体7割の子どもたちを引き上げたいという目標値になっているので、7割という数値を出しているものです。それが例えばボールで言うと50%ぐらいということは、東京都で言う7割の子どもたちがクリアできているものをクリアした子どもが5割というふうに見ますので、やはりこれは大きな課題であろうと認識しているところでございます。

大島委員

今意味はわかったのですが、ということは、中野区の子どもたちは東京都の中でもそういう体力テスト的なことでは低目の水準だということなのでしょうか。

指導室長

必ずしもそうではなくて、東京都で言うと大体平均値か、それよりも少し低いぐらいという形になっています。

山田委員

学校の中で、日常的な教科としては保健体育の体育のところで指導してくるのだと思うのですけれども、私たちが子どものころは毎朝ラジオ体操をやっていたんですね。あれだけでも随分違うのかなと。日ごろからバランスのいい運動を取り入れるということで、ラジオ体操を復活するとか、ほんの短い時間で毎日そういった体を動かすということをやれるわけですね。それは意図的にですけれども。

あと、中休みとかに自分たちで意欲的に遊ぶというのはまた別の話だろうと思うのですけれども、そういった取り組み、もしくはあとは縄跳びとか、いろんな仕掛けがあるのかなと思うので、全体で何かやることで学校全体が意欲を高めていくということもひとつお考えになったらいかがかと思うのですけれども、いかがでしょうか。

指導室長

まず、ラジオ体操のお話なのですが、私も昨年度まで現場の校長をしていましたので、若い先生たちにラジオ体操をちょっとやってみなさいと言うと、なかなかできていないんですね。それで、個人的に私は教えた記憶があるのです。運動の日常化という意味では、各学校も取り組みをしています。今、委員がおっしゃったように、縄跳び週間を設けたり、マラソン週間を設けるとか、私が勤めていた学校では、その週間になると20分休みは必ず全員でマラソンをするとか、昼休みは縄跳びをする。

先ほどゲーム性というお話をしたのですが、ただ単に頑張るだけでは子どももやはり目標が設定できないので、そうすると、長縄大会を一定の期間後に設けるとか、短縄大会を設けるとかいうことで、そこで子どもたちはどうしても優勝したいとか、一生懸命頑張りたいという気持ちが出てきますので、家に帰ってからもやっているなんていう話をよく聞きます。そんな取り組みを中野区の中でもいろんな学校が年間の中で季節に合わせた設定をしているかと思いますので、そういうことが必要だということを改めてまた学校のほうにもお伝えをしたいなと考えます。

山田委員

あともう1点、生活習慣ということで考えますと、先ほどの生活習慣病健診の中学校1年生の皆さん方のアンケートを見ていくと、食事の量、食事の速さと肥満というのはかなり関係してくるんですね。要するに、早く食べる子は肥満傾向が出てくる。もちろん量を食べるわけですね。考えてみますと、中学校の昼の給食、早過ぎますよね。30回かむなんていうどころじゃなくて、4～5回で飲み込んで、2～3分で食べてしまう人がほとんど

ですよね。その後の子どもたちの昼休みの活動があるためにでしょうけれども、幾らなんでもちょっと早過ぎるかなという気がするので、やっぱりよくかんで、少しみんなと話しながら楽しく給食をしましょうというような取り組みも一つあっていいのかなと。

それはご家庭も同じだと思うんですね。お食事をみんなで囲んで食べることの楽しさ、そういったことにもつながるのかなと思います。その辺の取り組みはなかなか現場では難しいかなと思うのですけれども、我々も必死になって食べてやっと追いつくぐらいの速さですので、そういったことも現場ではあるかなと思うのですが、いかがですか。

指導室長

学校は12時20分ぐらいで4時間目が終わりまして、大体20分ぐらいかけて準備をします。それで、20分かけて食べてというのが大体の普通の時定なんですね。20分間かけて本当にゆっくり食べてほしいなと思うのですが、さすがに小学校高学年から中学生になってきますと、やはり5分、10分で食べてしまう傾向があるかと思しますので、それは教員のほうが30回かむとか、いろんな意図的な働きかけをしていく必要があるかなと思います。

食育というのが今一つのテーマになっていますので、食育はやはり給食の時間で投げかけることは十分ありますから、きょういただいた意見を少し整理して学校のほうにも伝えていきたいなと考えます。

山田委員

それに関して、東京都が指定した栄養教諭というのは、配置とか、これからどのようになっていくのか、教えていただけますか。今、中野はどういう状況でしたっけ。

指導室長

栄養教諭については、中野区に現在1人配置をされています。東京都としてはいろんな未配置の地区がありますので、そういうところに増やしていくという考えがありますが、本区でこれ以上栄養教諭を増やすということは基本的にないかなと思います。ただ、栄養教諭が中心となって、ほかの栄養士さんにこういう取り組みが必要だよとか、研究成果などを伝えることで、中野の食育については向上させていきたいと考えております。

飛鳥馬委員

質問ではないのですけれども、子どもたちに伝える必要があるかなと思っているのですが、この体力のことは、今の私たちの文明とか文化が進んで便利な生活、これがやっぱり一番の原因かなと思うんですね。私の子どもたちで言えば、車なんてほとんど田舎に走っていませんでした。1か月に1回見るかどうかという感じですから、どこかへ行くと

すると、歩くか自転車しかないわけですね。そういう経験の方がいると思うのですけれども、エスカレーターもエレベーターもほとんどなかったですね。今はなるべくエスカレーターやエレベーターに乗らないで階段を上がりなさいと言うけれども、そんなのは昔は当たり前だったわけです。

それから、家の手伝いといったって、私はお風呂にいっぱい水をくむのに、井戸とお風呂場が10メートルぐらい離れているものですから、バケツにいっぱいいっぱいくむわけです。小学校3～4年から毎日水くみをやらされるわけです。そういう手伝いも体力の必要なものがたくさんあったわけですね。そういうのが今は少なくなってしまったわけです。だから、便利になったということはそういうことであって、体力がだんだん衰えていくようになるのだと思うのです。

そこで大事なことは、体力は使わないとどんどん低下するということをよく言われますよね。一流のスポーツ選手でも、2日か3日運動しないともとに戻るのが大変だと。毎日やらないといけないということを一流選手のほとんど、ピアニストもそうらしいですね。もう世界一流のピアニストでも、どこに行くのでも、本当の会場じゃなくてどこかを借りてでもタッチしないとだめなのだそうです。技術が保てないと聞いたことがあります。

だから、体力はまさにそうなんだと思うんですね。動かさなければどんどん衰えていつてだめになる。私は今実感していますけれども。そういうことで、子どもたちも便利だからいいんじゃないなくて、老後のこともありますけれども、現在の体力を維持する、あるいは少しでも向上させるためには、やっぱり鍛えるといいますか、動かさないのだめなんだよと。体力を使うと脳も活性化すると言う学者もいますので、そういうことを子どもに伝えることが必要なのだろうなと思っていますのです。

高木委員長

それでは、これで協議事項及び事務局報告を終了いたします。

子どもたちの体力の向上や健康な生活習慣の確立は、「中野区教育ビジョン（第2次）」においても課題として掲げられているところです。本日の調査結果や協議内容、あるいは傍聴者の方の発言を踏まえて、今後の取り組みに生かしていきたいと思えます。

<報告事項>

高木委員長

それでは、次に委員長、委員、教育長報告に移ります。

<委員長、委員、教育長報告事項>

高木委員長

まず、私から。前回、4月20日の第13回定例会以降の主な委員の活動について報告いたします。

4月25日、平成24年度中野区幼稚園教育研究会総会に大島委員と田辺教育長が出席されました。

私からは以上です。大島委員、お願いします。

大島委員

今、委員長からお話がありました幼稚園教育研究会の総会が東中野幼稚園で行われたのですけれども、出席いたしました。今、区立の幼稚園は2園になってしまいましたので、必然的に先生の数も少なく、この研究会のメンバーも人数は少ないということで、この総会も先生方が全部で10人ですかね。私も含め区の担当者の方とかの来賓がほとんど同じ数ぐらいで、何か来賓の人たちが圧迫感を与えたみたいなことで大変申しわけないような、でも、若い先生も多くて、大変活気があるというイメージを持ちました。

私もちょっとごあいさつをしたのですけれども、とにかく今は少子化で、子どもさんはもう国の宝、社会の宝なので、その子どもたちに健全に健やかに育て、将来の日本を担ってもらわなければいけない。そういう大事な職責があるということで、頑張ってくださいというお話をしてまいりました。以上です。

高木委員長

山田委員、お願いします。

山田委員

20日の午後、東京医師会で地区医師会の会長協議会があったときに、新聞で報道されましたけれども、ポリオの予防接種のことの通達がありました。

ご承知のように、ポリオは昭和30年代に日本では2,000人近い患者さんが出て、小児麻痺がはやってしまったので、急遽、ロシアから生ポリオワクチンを導入して、それが現在、日本における生ポリオの予防接種ということで、7歳6か月までのお子さんに2回接種ということでやっていました。昨年のちょうど今ごろ、生ポリオ接種による2次感染によってポリオが発症するということがあって、多くの先進国では不活化ポリオワクチン——注射剤ですけれども、これを導入しているという経過があって、厚生労働省の小宮山大臣がこの日記者会見をして、日本でも不活化生ポリオワクチンが9月から始まりますよということが発表されました。

そのことを受けた話なのですけれども、そうなりますと、恐らく今までやっていた集団接種での生ポリオはこれから使わなくなるだろうと。ほとんどが個別接種の不活化ポリオ接種になるということと、もう一つは三種混合でDPTというワクチンがあるのですけれども、これにポリオを混ぜたDPTタップも11月に発売される予定です。ですから、今後、生まれてくる小さい赤ちゃんは、DPTタップで4種類のワクチンを使って予防する。過渡期の方たちは不活化ポリオワクチンを個別で接種することの法整備がもうそろそろなされるということで、今まで日本で使っていた生ポリオワクチンは一時的に接種を見送るようになるだろうという話が出てまいりました。安全性の高いワクチンの開発が世に出るということは、お母様にとっては一つ安心な材料がふえたのではないかなと思っております。

26日は、私は東京大学附属中等教育学校の学校医をやっていますので、その健診で800名余のお子さんの健康診断をしてまいりましたが、ことし3月に東京駅伝で、あの東大附属には陸上部がありまして、陸上部に所属している方たちも健診で来て、そのとき僕は会っていたものですから、「先生、どこかで見ましたよね」と言われて、「いや、味の素スタジアムで会ったよね」という話をしました。

陸上部を持っている中野区内の中学校は東大附属ともう1校あると思うのです。それが中心となって主に駅伝の大会に出てくるわけですが、そういった子どもたちに、なかなか陸上にいそむということはないと思うので、「ぜひ頑張って、来年、中野区はもう少し順位を上げようね」と励ましてきましたので、今年度は期待していただければと思います。私からは以上です。

高木委員長

それでは、飛鳥馬委員、お願いします。

飛鳥馬委員

特にございません。

高木委員長

教育長。

教育長

特にございません。

高木委員長

それでは、各委員から以上の報告につきまして補足質問、あるいはご発言がありますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、ほかに事務局からの報告事項はありますでしょうか。

それでは、以上で本日の日程をすべて終了いたします。

ここで傍聴者の皆様に5月の教育委員会の開会予定についてお知らせします。

5月の教育委員会の開会予定は、議事日程表の裏面に記載しておりますので、後ほどお読みいただければと思います。

これをもちまして、教育委員会第14回定例会を閉じます。

午前11時30分閉会